大阪大谷大学図書館所蔵史料の紹介

梯　信暁・竹本　晃
苫名　悠・馬部隆弘

大阪大谷大学文学部歴史文化学科の前身にあたる文化財学科は、平成一二年（二〇〇〇）に立ち上げられた。その設立準備段階から数年にわたって、本学図書館では歴史資料が重点的に購入された。それらはその後、本学博物館で展示されることはあったものの、冊子などで紹介されることはなかった。そのため、研究で活用されたことは皆無といってよい。

そこでこのたび、より広く活用されるように、歴史文化学科の教員で分担して解説を付すこととした。解説の文責は、各項目の末尾に記している。なお、目録の作成は馬部が担当した。

【文書1】顕杲灌頂勘文

醍醐寺の学僧である顕杲（一一二二～一二七七）が、承安三年（一一七三）に記したもので、畿内諸寺における灌頂の先例が列挙される。末尾には、蓮華王院でこれを認めた旨が記される。完全な状態のものは少ないが、承安二年の年代を記すものなど紙背文書も数点存在する。

端裏書に「伝領道快」と記されるように、【文書1】はのちに醍醐寺地蔵院の道快（のちに聖快、一三四四～一四一七）が所持している。「顕鈔」（京都府立総合資料館編『東寺観智院金剛蔵聖教目録』一七、京都府教育委員会、一九八五年、四五九頁）の奥書にも「於醍醐寺地蔵院、以顕杲／自筆草案等書写之、不可／有外見云々／金剛仏子道快」と記されているように、顕杲が残した自筆草案等は醍醐寺地蔵院に残されていた。よって、【文書1】も地蔵院旧蔵文書と考えられる。

なお、顕杲については柴田賢龍『日本密教人物事典』醍醐僧伝探訪上巻（国書刊行会、二〇一〇年）三六〇頁～三六三頁が、道快については伴瀬明美「室町期の醍醐寺地蔵院」（西弥生編著『醍醐寺』戎光祥出版、二〇一八年、初出二〇一六年）がそれぞれ詳しい。

（馬部）

【文書2】仁王経法伴僧交名注進状案など五通

【文書2】のうち建保七年（一二一九）の①は、端裏に「仁王経法伴僧交名案」と記されているように、仁王経法での伴僧を列挙したものである。西弥生「三宝院流と仁王経法」（同『中世密教寺院と修法』勉誠出版、二〇〇八年）も指摘するように、こののち仁王経法は醍醐寺三宝院流を象徴する修法となっていく。

①には、醍醐寺座主である光宝以下二〇名の僧名が列挙される。森田清太郎氏所蔵文書（東京大学史料編纂所影写本）のなかには建保五年の「仁王経法伴僧張文」が含まれており、そこに列記される二〇名のうち光宝・行厳・実覚・定運・任賢・尊祐・成信・継賢・孝賢の九名までが①の僧名と一致する。さらに、森田清太郎氏所蔵文書に含まれる建保六年の「普賢延命法伴僧張文」に列記される二〇名のうち、光宝・行厳・実覚・定運・全賢・深賢・杲運・尊祐・成信・孝賢・浄尊の一一名もの名が一致する。それでいて【文書2】に含まれる文書と森田清太郎氏所蔵文書は、一点も重複しない。したがって、両者は本来一括の文書群で、別々に流出したものとみられる。

その点を裏付けるために、森田清太郎氏所蔵文書に含まれる「孔雀明王護摩巻数案」を取り上げて検討したい。

孔雀明王護摩所

奉供

供養法二十一箇度

護摩供二十一箇度

諸神供三箇度

奉読

大孔雀明王経二十一部

奉念

仏眼真言二千一百遍

大日真言二千一百遍

本尊真言二万一千遍

大金剛輪真言一百五十遍

一字金輪真言二千一百遍

右奉為　禅定二品大王御願成就、自去十七日迄于今日并一七箇日夜之間、殊致精誠奉修如件、

寛喜元季十二月廿四日　阿闍梨前権僧正法印大和尚位成賢

【文書2】の③も同じく表題が「孔雀明王護摩所」で、日付も寛喜元年（一二二九）一二月二四日となっており合致する。相違点は次の部分である。

本尊真言二万一千、

八字文殊真言二千一百、（合点）

不動真言二千一百、（合点）

無能勝明王真言二千一百、（合点）

大金剛輪真言一百五十、

右のように本尊真言と大金剛輪真言の間の三ヶ条に合点が振られている。そして、③の裏面には、この三ヶ条を削除した同文が記される。さらに③の表面の余白部分には、森田本「孔雀明王護摩巻数案」と同筆で文字の練習がなされている。つまり、③は森田本の下書といえる。

なお、千々和到・北爪寛之・熊谷博史「國學院大學図書館所蔵『森田清太郎旧蔵醍醐寺地蔵院等文書』」（『國學院大學校史・学術資産研究』第三号、二〇一一年）も指摘するように、森田清太郎氏所蔵文書の多くは醍醐寺地蔵院文書で占められている。実際、「孔雀明王護摩巻数案」にもみえる成賢のもとで三宝院流は分派し、①にみえる深賢が地蔵院流となる（前掲西論文「醍醐寺諸流血脈」）。それを受け継いだのは、文永四年（一二六七）の⑤「降三世御修法巻数案」で発給者として名のみえる親快である。以上の点から、【文書1】と【文書2】は本来は森田清太郎氏所蔵文書と一括の醍醐寺地蔵院文書であったといえる。

（①翻刻）

「（端裏書）建保七年二月十三日

仁王経法伴僧交名案　於賀陽院殿在之」

注進　　伴僧交名事

権大僧都光宝　　権少僧都行厳

法眼　実覚　　権律師　定運

全賢　　深賢

尊深　　大法師　杲運

任賢　　尊祐

覚遍　　成信

良厳　　公厳

孝賢　　厳実

浄尊　　心海

兼海

右注進如件、

建保七季二月十三日　　行事法橋大位厳円

阿闍梨前権僧正（ママ）、、、

（馬部）

【文書3】足利直義軍勢催促状

観応元年（一三五〇）に河内国茨田郡伊香賀郷（大阪府枚方市）の地頭職である土屋宗直に対して、高師直・師泰兄弟討伐に参加するよう命じた足利直義の軍勢催促状である。既知のもので、『枚方市史』第六巻（一九六八）に所収される土屋氏文書一四号に該当する。ただし、『枚方市史』は足利直義の花押を足利尊氏の花押と取り違えている。

（翻刻）

師直（高）・師泰（同）殊（誅）伐事、早可致軍忠之状如件、

観応元年十一月廿三日　（花押）（足利直義）

土屋孫次郎（宗直）殿

（馬部）

【文書4】和田盛助処分状

寛正二年（一四六一）に和田盛助が嫡子太郎次郎に相続したときの処分状である。これと同一のものが、保阪潤治氏所蔵文書（東京大学史料編纂所影写本）のなかに含まれているので、大正頃に保阪氏が蒐集し、戦後に散逸したものとみられる。もともとは和泉の和田家に伝わった文書で、渋谷一成「巻三所収文書の内容と翻刻」（『堺市博物館研究報告』第三七号、二〇一八年）のうち、和田文書三巻一二号の案文である。影写本と比較すると、裏打などの装丁を施すときに端裏書の一部や裏花押を失ったことがみてとれる。そのため、後掲の翻刻は、影写本に基づいて欠落を補った。

案文とはいえ花押や裏花押も付されているので、正文のつもりで作成したものの、修正すべき点が発生したため結果として案文となったようである。修正点は、行間への書き込みなどであるが、正文と比較すると、大きく異なる点がある。案文の最後の一つ書きの続きに、正文では池底一五ヶ所と二ヶ所の池の取水分、そして山林九ヶ所が追記されているのである。この加筆部分は、永仁二年（一二九四）の和田清遠の処分状をほぼそのままに写したものであることから、二〇〇年以上のちの寛正二年段階の実態をそのまま反映しているかどうかは検討の必要がある。

（翻刻）

「正心ノ次（端裏異筆）

盛助ユツリ状」

譲与　左近将監（和田）盛助処分之事

定

一和田惣領職并開発惣下司職

一放上宮并社々惣長者職

一放光寺俗別当職

一蔗（厳）上下別所別当職

一檜尾寺別当職

一得富・恒富名田畠等

……（継目裏花押）

一上中条山林荒野并池河官（管）領

一上中条在家百性（姓）人夫伝馬牛等

一和泉近木郷十生長官職

一河内国金太庄惣判官代職并長曽祢郷郡司職

一和田安支名此ハ盛助一期之後可知行

右件所職等悉嫡男太郎次郎仁譲渡者也、雖多兄弟依為少得分不及支配也、面々不可有恨旨也、弟妹共惣領トシテ可扶持者也、仍為後代譲之状如件、

寛正弐年辛巳十月十四日　大中臣盛助（花押）

（馬部）

【文書5】足利政氏書状

発給者の足利政氏は二代目の古河公方だが、『戦国遺文　古河公方編』にも未収の文書である。宛先は常陸下妻城主で、時期から判断して多賀谷祥潜と考えられる。入道後の祥潜の名は大永六年（一五二六）の光明寺文書一号（『茨城県史料』中世編三、一九九〇年）で確認できるが、一般に知られる「家植」という諱は「多賀谷家譜」などの編纂物でしか確認できない。その一方で、下妻市小野子に伝わる永正一七年（一五二〇）の木造千手観音座像胎内銘に「大檀那多賀谷下総守基泰」とみえるので（『下妻市史』上、一九九三年、三二五頁・三七二頁）、基泰が入道して祥潜と称したと考えたほうがよさそうである。

そして、入道しているので、【文書5】は永正一七年以降のものと推察される。そのころの政氏は入道して「道長」を称していた（佐藤博信編『戦国遺文　古河公方編』東京堂出版、二〇〇六年、三九九号）。嫡子の高基との古河公方の座を巡る抗争で、多賀谷「家植」が政氏に比較的近い立場にあったことは、「円福寺記録」（『古河市史』資料中世編、一九八一年、一五三一号）などの編纂物からも読み取れるが、【文書5】はそれを裏付けるものといえよう。

（翻刻）

樹淡到来忻入候、巨細長門守可申遣候、謹言、

九月十七日　（足利政氏）（花押）

多賀谷下総（祥潜）入道殿

（馬部）

【文書6】室町幕府奉行人連署奉書など二通

永正一六年（一五一九）の【文書6】①では、南禅寺東禅院が室町通錦小路上ル山伏山町に所在する所領の安堵を室町幕府に求めて認められている。同年に興福寺東北院と北野社日連歌外会所が相論を起こし、室町通と西洞院通の間の錦小路通に面した所領をめぐって対峙した。その相論に自らの所領が巻き込まれそうになると、荘園領主たちは次々と幕府に支証を提出して安堵を求めたようで、六月八日に天龍寺三会院、七月五日に南御所（宝鏡寺）、八月一一日に南禅寺徳隣庵がそれぞれ奉行人奉書を得ている（今谷明・高橋康夫編『室町幕府文書集成　奉行人奉書篇』下、思文閣出版、一九八六年、二九八九号・二九九三号・二九九七号）。【文書6】の①は、その一連の動向のなかに位置づけることができる。

永禄二年（一五五九）の②は、①のやや西にあたる錦小路町の土地にかかる地子銭の徴収権を冨春軒一清が東禅院に寄進したものである。よって、受益者から判断して、①と②はいずれも南禅寺東禅院文書といえる。東禅院文書は近世段階から流出していたようで、幕末から明治にかけての国学者である御巫清直が各地で書写した文書を集めた「輯古帖」のなかにも、「松坂某蔵」として収録されて

いる（『三重県史』資料編中世1（下）、一九九九年、七四四頁）。

（①翻刻）

南禅寺東禅院英安首座并英珊首座申洛中錦少（小）路室町北西頬屋地口南北六丈六尺奥東西廿五丈事、今度東北院雑掌競望之条、為御礼明知行有無被相尋候処、去永正元年以前請取出帯之条、彼両首座当知行之段分明之上者、可全領知之旨被成御下知訖、宜令存知之由、所被仰出之状、如件、

永正十六六月十九日　　貞運（飯尾）（花押）

基雄（斎藤）（花押）

当地百性（姓）中

（②翻刻）

下京錦小路屋地子銭之事、為軒領寄進申上者、誰違乱不可有他妨候者也、仍如件、

永禄弐未　　冨春軒

卯月十日　　一清（花押）

東禅院

泉等軒

（馬部）

【文書7】秋野返答　御條目相違趣意書（四天王寺衆徒相論記録）

享保一五年（一七三〇）に四天王寺の衆徒と秋野坊の間で生じた訴訟の記録である。衆徒一二院のうち二臈にあたる二舎利が記録したものである。

「鬼洞文庫」の蔵書印が捺されていることから、岸和田在住の蒐集家であった出口神暁（一九〇七～一九八五）のコレクションの一部と判明する。現在、鬼洞文庫の多くは、関西大学図書館に収蔵されている。

（馬部）

【文書8】天王寺秘記（四天王寺境内名所記）

【文書7】と同じく「鬼洞文庫」の蔵書印が捺されている。四天王寺境内の名所を列挙したものである。

（馬部）

【文書9】伴林光平書状など六通

【文書9】の①と②は、国学者で天誅組の変に参加した伴林光平（一八一三～一八六四）から枚岡富之輔（平岡鳥見之介）に送られたものである。③は光平が摂津にある知己の寺院に宛てたもので、「此人兼て申上候和州いかるか（斑鳩）の里平岡富之介殿にて御座候、此度有馬湯治いたし度発足被致候、彼方之事とも一向不案内之よしニ付」と述べたうえで、現地の案内を依頼している。したがって、これも平岡富之介が有馬に赴いた際に持参したものといえる。

伴林光平と親しい大和斑鳩の平岡氏といえば平岡鳩平で、のちの北畠治房（一八三三～一九二一）が思い当たる。差出が「神」で宛

先が「布」となっている④に貼られた付箋には、「布ハ布穀ノ布、神／ハ神楽声舎ノ神の／チ（子）、余ニ宛タル光平ノ／書也　明治四五・六・六日／布穀鑑識」との説明が記される。布穀とは北畠治房の雅号なので、若い頃の彼が富之介という変名を用いていたことや、一連の文書が北畠治房旧蔵のものということがこの付箋から判明する。

（馬部）

【文書10】天誅組檄文など四通

文久三年（一八六三）の天誅組の変にあたって、伴林光平が大和国吉野郡北山郷に対して認めたとされる檄文。台湾在住の山移定政旧蔵文書で、明治四三年（一九一〇）に定政が光平の弟子であった北畠治房に鑑定を依頼した際の治房の書簡もともに軸装されている。治房は、この檄文をみたときに【文書9】と対照したに違いあるまい。題簽と箱書は池辺義象によるもので、大正二年（一九一三）の土方久元による序詞と中山孝麿の賛を巻頭に付している。

（馬部）

【文書11】桂小五郎書状

桂小五郎（一八三三～一八七七）が、同じく長州藩士の大和弥八郎（一八三五～一八六五）に宛てて送った書状である。文中に禁門の変で没する久坂玄瑞（一八四〇～一八六四）の名がみえるので、文久三年（一八六三）以前のものである。

（翻刻）

今朝御伺可申上筈ノ処、客来有之、不得其意、残念何卒御悔恕可被下候、京師変事心ニ留共、乙第ニ老師御差出方、福原翁（元圃）へ御示談被下度、中村九郎宛ノ書、久坂義助（玄瑞）へ内々御渡し奉願候、いつれ今晩登堂拝鳳万縷〳〵

八月十六　　木圭（桂小五郎）

大和（弥八郎）老兄

御親拆

（馬部）

【文書12】徳富蘇峰書簡など六通

書簡六通が一軸に合装されている。いずれもジャーナリストの徳富蘇峰（猪一郎、一八六三～一九五七）から医師の佐伯理一郎（一八六二～一九五三）に送られたものである。蘇峰と理一郎は年齢も近く、同じ肥後出身であった。蘇峰は、いわゆる熊本バンドの結成に参加しているが、理一郎は明治一七年（一八八四）に熊本バンドの小崎弘道から洗礼を受けた。そうした点から、関係を持つようになったと思われる。

現在、佐伯理一郎旧蔵資料は、同志社大学人文科学研究所に寄贈されている。その内容は、本井康博「佐伯理一郎と内村鑑三」（『同

志社談叢』第一九号、一九九九年）および林潔「『佐伯理一郎旧蔵資料』の紹介」（『キリスト教社会問題研究』第六七号、二〇一八年）に詳しい。また、佐伯理一郎宛ての来簡集は早い段階で佐伯家を離れ、阿知波五郎氏の手を経て現在は杏雨書屋が所蔵している。その内容については、多治比郁夫「杏雨書屋所蔵書簡集（六）・（七）」（『杏雨』第一一号・第一二号、二〇〇八年・二〇〇九年）に詳しい。

そのいずれにも蘇峰の書簡は含まれないことから、意図的に蘇峰の書簡のみが抜き取られ軸装されたことがわかる。同様の事例は、松崎八重「新渡戸稲造書簡二通の紹介」（『華頂短期大学研究紀要』第一三号、一九六九年）や『内村鑑三全集』第三七巻～第三九巻（岩波書店、一九八三年）などでも確認できる。新渡戸稲造・内村鑑三など著名なクリスチャンの書簡は、特別な扱いを受けたようである。

蘇峰と理一郎の間に交流があったことは、公益財団法人徳富蘇峰記念塩崎財団が所蔵する理一郎から蘇峰に宛てた書簡からも確認できる。財団法人徳富蘇峰記念塩崎財団編『徳富蘇峰宛書簡目録』（徳富蘇峰記念館、一九九五年）によると、大正元年（一九一二）から昭和一六年にかけて一七通が伝わっている。

二人が出会った時期ははっきりしないが、接近する契機となったのは明治二七年の日清戦争だと思われる。明治一七年に海軍の軍医補となった理一郎は、同一九年にアメリカとドイツに留学し、同二四年に帰国する。その後、海軍を退き、京都で産婦人科医を開業するとともに、同志社病院にも勤務する。ところが明治二七年に日清戦争が勃発すると、海軍少軍医として召集されて佐世保海軍病院に勤務することとなる（「佐伯理一郎先生略年譜」『医譚』復刊第三号、一九五三年）。

【文書12】のなかで最も古い①は、同年のもので佐世保にいる理一郎に宛てられている。文頭が「過日者久し振ニ拝謁ヲ得」と始まることから、この直前に二人は久しぶりに面会したことがわかる。蘇峰は、日清戦争を日本の勢力拡張の好機と捉えており、取材に注力していた。そうしたところに、海軍に理一郎が戻ったことを耳にして、交遊を深めたのであろう。

（馬部）

【絵図1】戒壇堂荘厳之図

東大寺戒壇院の戒壇堂平面図である。裏書に「享保廿乙卯年四月日新図之　権少僧都懐賢（年預五師）」「戒壇堂荘厳之図　東大寺公物」とあることから、享保廿年（一七三五）に描かれたことや東大寺旧蔵であることがわかる。おそらく、【絵図1】～【絵図3】は一括のものと思われる。

この年の年預五師は、裏書にもあるように尊光院懐賢であった。【絵図2】への書き込みに「第三興隆」とあるように、現在の戒壇堂は三度目の再建にあたるもので、享保一八年二月に完成の供養が

蓮花心寺跡と慧光の墓（左から１基目）

行われている。

なお、この工事を遂行した当時の東大寺長老慧光（一六六六～一七三四）は、大阪大谷大学に程近い河内国錦部郡彼方村出身である（『百年のあゆみ　おちかた』彼方小学校創立百周年記念事業実行委員会、二〇〇一年）。彼は江戸の湯島に徳川綱吉が創建した霊雲寺の住職で、幕府の力を背景に享保一〇年に東大寺長老に就任した。そして【絵図２】への書き込みにもあるように享保一二年に東大寺に移ってきた。

当時の戒壇堂は永禄一〇年（一五六七）の戦火で失われたままで、仮堂しかなかった。慧光はその復興を託されたのであった。そして慧光は、戒壇院の復興を見届けた翌年の享保一九年一一月四日に没した。慧光は彼方村にかつてあった蓮花心寺の住職も兼ねていたため、彼の墓は東大寺・霊雲寺のほか、富田林市立彼方保育園南西の蓮花心寺跡地にも残っている。

（馬部）

【絵図２】東大寺戒壇院境内絵図

裏書に「東大寺／戒壇院境内絵図」とあるように、戒壇院の境内全体を描いた絵図である。表面左下に「安永三甲午年十月新造／長老明道／寺護瑞鑑」と記されることから、安永三年（一七七四）に描かれたことがわかる。

戒壇堂の右脇には、「戒壇第三興隆慧光／享保十二丁未歳三月廿

五日従江戸霊雲寺移転于本院／同十八年癸丑二月廿二日戒壇堂供養」と、復興の経緯も記される。

（馬部）

【絵図3】戒壇院僧坊等麁色

表紙に「戒壇院僧坊等麁色」「大工次郎三郎之作」と記される。戒壇堂の西側にある僧坊など、複数の建造物に使用された柱などの部材を列挙したものである。年代は記されないが、文字や料紙の様子を見る限り、享保期の再建に伴うものではなく、近世初期のものと思われる。おそらく、慶長六年（一六〇一）の整備に伴うものであろう。

（馬部）

【絵図4】四天王寺火除地絵図

火事の延焼を防ぐため、四天王寺の伽藍周辺は火除地として畑地となっていた。【絵図4】は、その火除地を描いたものである。絵図への書き込みによると、火除地にあたる天王寺村の建家と伽藍を囲う藪垣との間の間数が、享保元年（一七一六）と翌二年に四天王寺と天王寺村双方立ち会いのもと改められたという。それから年数も経過したので、享和元年（一八〇一）に再確認されて作成されたのが【絵図4】である。

書き込みには、火除地は畑地で年貢地にあたるため、新規に建物を設けるのは原則として無理である旨もみえる。ただし、どうしても必要に迫られたならば、まず四天王寺に申し出たうえで、領主に願い出て許可をとるという手続きの方法も記されている。

（馬部）

【聖教1】大般若波羅蜜多経　巻第五百三十四（殖木宮大般若経）

大般若波羅蜜多経は、大般若経とも呼ばれ、全六百巻から成る大部の経典で、般若経典の集大成とも言われている。日本では、奈良時代以降、功徳や追善、厄災除去を願って盛んに写され、今でも各地に多くの実物が残っている。

【聖教1】は、そうした六百巻もののなかの一巻である。現状は巻子装で、これは当初からの形態であると考えられ、奥には保元三年（一一五八）の修補の識語があり、少なくとも保元三年以前に写されたとわかる。おおよそ平安時代の後半の書写経と考えてよい。

表紙は後補であるが、薄茶色で、金銀の切箔、銀の野毛、裂き箔などが施され、整理記号と思われる「正」が表題下に記されている。この「正」は、大般若経の編成を示す記号としてよく用いられる千字文函号とは別のものである。

経紙は楮紙であり、全一七紙からなる。一行は一七字詰めで、第二紙目の計測値として、紙高二四・七cm、一紙幅五〇・〇cm、界高一九・八cm、界幅一・八cm、一紙行数は二八行である。軸は、黒漆塗の割軸が用いられている。

【聖教1】の特徴としては、界高と同程度の高さ一九・三cmの宝塔の朱印が押されていることである。屋根の両端には風鐸がぶら下がり、屋根の両端と相輪を固定する線も描かれている。蓮台の上に乗る宝塔の開いた扉のなかには、蓮台に乗る仏像が二体座り、それぞれの光背も見える。

宝塔の朱印は、第一七紙目（最終紙）以外、一紙ごとにすべて押されている。押印の場所は統一されていないが、一紙の中央より手前が多い。また、経紙の背面にも九箇所押されている。経文は宝塔朱印を押してから書かれている。

この宝塔朱印と同じものを押した大般若経は見つけられていないが、もっとも近いものとして、奈良県五條市満願寺の大般若経があげられる。満願寺本の宝塔朱印は、【聖教1】よりも少しだけ高い二〇・四cmであり（奈良県教育委員会事務局文化財保存課編『奈良県大般若経調査報告書　二　本文篇』奈良県教育委員会、一九九五年）、宝塔の描写が細部まで表現されている。両者を見比べると、ひじょうによく似ていて、天永三年（一一一二）から永久四年（一一一六）の書写である満願寺本との時期も近いので、【聖教1】に押された宝塔朱印は、満願寺本を参考に作られたものと推測できる。

書写の書き手については、複数の手があることまではわかる。しかし、何人であるかまでは断定できない。通常は、一巻につき一人で書写することが多いので、珍しい事例のうちに数えられる。

また、その書き手とは別筆で、かつ擦り消されていて、きわめて薄い墨痕が内題の下に見える。そこには「伊賀国山田郡殖木宮」と書かれている。この記載は、伊賀市教育委員会が所蔵する「植木宮大般若経」と呼ばれている一群と同じものである（『伊賀市史』第四巻、二〇〇八年、二四二頁・二四三頁）。さらに、伊賀市教育委員会所蔵のものには、その後の修補・供養の識語も残されており、殖木宮大般若経として揃えられた後に、和泉国の横山に移されていることも判明している。その後の動きはわからないが、田中塊堂『日本古写経現存目録』（思文閣、一九七三年）によると、本学が購入する以前は、松本文三郎氏所蔵であったという。

殖木宮大般若経は、残存する経巻が多くはないため、今なお分類ができておらず、不明な点が多い。ほかの僚巻も含めた全体を見通した分析が必要である。

（内題下の識語）

「伊賀国山田郡殖木宮」（擦り消し）

（奥の識語）

「保元三戊寅年四月五日加修補供養畢」

（その他識語）

「六百内四帙四」

「六百内四刱四巻」

（竹本）

【聖教2】大般若波羅蜜多経　巻第一百三

大般若波羅蜜多経（大般若経）は、一切経のなかでもっとも大部の経典である。日本では、飛鳥・奈良時代になると、一切経を完備するための国家事業がたびたび行われ、奈良時代の終わり頃までには、五月一日経をはじめとする数セットの一切経が存在していた。平安時代になっても、一切経の写経事業は衰えず、皇族や貴族の発願をはじめ、各寺院でも備えるような広がりをみせている。

【聖教2】も、そうした一切経のうちの一部であると考えられており、古書店で出回っていた段階から、平安時代の終わり頃に整えられた法隆寺一切経の一つであると認識されていた。

おそらく法隆寺五師で法隆寺一切経の修補に携わった相慶の名が奥にみえることから、そのように判断されていたのであろうが、それは誤りである。【聖教2】は、法隆寺一切経とは別の大般若経六百巻を補填するために、いずれかから法隆寺の相慶が収集したものである（堀池春峰「平安時代の一切経書写と法隆寺一切経」『南都仏教史の研究　下〈諸寺篇〉』法蔵館、一九七二年、初出一九七一年）。なお、最初に仕立てられた明確な時期や場所は不明である。

【聖教2】の現状は、黄灰色の表紙（後補）を付した巻子装で、表題はない。経紙は、黄褐色の楮紙からなり、虫喰いが各所にみられ、それを保護するように全面に裏打ちが施されている。

経紙の紙数は、全一七紙からなる。一行は一七字詰めで、第二紙目の計測値をあげると、紙高二六・四cm、一紙幅五八・〇cm、界高二〇・一cm、界幅一・八cm、一紙行数は三一行である。界線の引き方は全体的に荒いが、紙継目に界線を引かないところなど、古さを感じさせる。軸は新補である。

当初の書写の時期は、明確にはわからないが、奥に長寛三年（一一六五）の修補の記載があるので、少なくともそれ以前と考えられ、おおよそ平安時代の後半におさまる書写経とみられる。

書写については、一巻が複数の人物によって書かれていることがわかる。少なくとも第四・五紙目間および第一〇・一一紙目間は、明らかに書き手が変わっている。第一〇・一一紙目間から、一紙行数が三一行から三三行に変わっていることも、そのことと関係しているのかもしれない。一紙行数が途中で変わったのは、第一一紙目以降の界線が一・七cmに変わったことによるものであるが、一紙幅は毎紙ほぼ一定しているので、新たに紙を補ったというより、一巻内の書写と装潢（この場合は界引）を分担していた珍しい事例と考えられる。

校正については、【聖教2】には、尾題の次行に「校了」の記載があるとはいえ、補紙によるかなり多めの修正がなされている。たとえば、通常は一紙につき三一行で書かれているが、第五紙目は三行、第一〇紙目は一行、第一二紙目は一七行、第一三紙目は四行となっている。

これらの一紙が短い箇所は、校正の過程で脱行が判明し、経紙をいったん切断したうえで、新たに書写して経紙を挿入したことを示

している。脱行があっても、経紙を追加しなかった箇所もあり、その場合は行間の界線上に行単位で経文を挿入している。

書写および校正については、かなり複雑な様相を呈しているので、それが当初からのものなのか、法隆寺の相慶らによるものなのかを見極めることが今後の課題である。

（奥の識語）

「校了」

「長寛三年乙酉法隆寺五師相慶為滅罪生善後世芹兼又

法界衆□□□□修補耳　敬白」（□□は虫喰い）

（竹本）

【聖教3】紺紙金銀字交書法華経断簡

写本一軸。鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』巻五、如来寿量品第十六の断簡。各行を金泥・銀泥交互に用いて書いている。「（我）成仏してよりこのかた、またこれに過ぎたること、百千万億那由他阿僧祇劫なり。これよりこのかた、我常にこの娑婆世界にありて、説法教化す。また余の百千万億那由他阿僧祇国において、衆生を導利す……」と、久遠実成の釈迦牟尼仏が登場して、此土および他土の教化、自身および他身示現の統一身を示し、「如来は、如実に三界の相を知見し……」と、諸法実相を知見することを宣言して、「寿命無量阿僧祇劫常住にして不滅なり」と、仏の常住を説く。『法華経』後半最大の山場の部分である。

（梯）

【聖教4】仁王経等八法口訣

写本一軸。表紙に「経」、表紙見返に、「此巻有八法　仁王　法花　寿命　六字　孔雀　請雨　宝楼閣　菩提場」とある。奥書は、「延慶三年五月十七日於桂宮印書写了　金剛仏子卯玄生年卅三」「明暦二丙申載二月仏涅槃日令図写之　多聞院小比丘恵覚」。

密教の事相上の諸口訣を記した書で、諸尊法八法が集められている。その概略は以下の通りである。

1. 仁王経法　遍照寺・小野両流の本尊・種子・三形・印・真言などを列挙し、不動を本尊とする小野流の曼陀羅を載せる。
2. 寿命経法　普賢延命法を指すことが述べられている。
3. 六字経法　種子・三形・道場観・印・真言・護摩を列挙し、本尊曼陀羅についての説明に続いて、醍醐流の曼陀羅を載せる。
4. 法花経法　本尊に関する議論に続いて、法花曼陀羅を載せる。
5. 孔雀経　梵号・密号・種子・三形・大壇図を列挙し、本尊の説明と共に本尊図を載せる。
6. 請雨経　本尊・壇法に続いて、二種の本尊図を載せる。
7. 宝楼閣経法　本尊・根本印・随心印・大陀羅尼・心真言・随心真言・諸尊の印を列挙した後、曼陀羅を載せる。

8．菩提場陀羅尼法　曼陀羅の説明に続いて、根本印・陀羅尼を列挙し、曼陀羅を載せる。

（梯）

【聖教5】辨顕密二教論

版本（高野版）上下二冊、加点本。上巻表紙には「二教論巻上」、下巻表紙には「二教論巻下」の外題がある。

空海（七七四～八三五）著。二巻。活字本は『大正新脩大蔵経』第七七巻等所収。成立年代は未詳であるが、弘仁年間（八一六年頃）と目される。ただし平安時代にはあまり流布しなかったとする説もある（大久保良峻「平安初期における日本密教の樹立と教学交渉」『密教文化』二三四、二〇一五年）。

内容は標題の通りで、顕教と密教の優劣が論じられている。顕教とは法相・三論・天台・華厳の諸宗を指し、それと密教すなわち真言宗の教えとを対比して、密教の優位を主張する。対比の着眼点は、説法をする仏身の状態・説法の内容・成仏までの時間・救済対象範囲の四つである。

顕教は応化身あるいは他受用身の説法であるのに対し、密教は自受用法身の説法である。応化身とは、凡夫のために三乗の教えを説く仏であり、他受用身は聖者のために一乗の教えを説く。三乗とは、声聞乗・縁覚乗・菩薩乗を言う。声聞乗・縁覚乗は自利のみを目指す小乗の教え、菩薩乗は自利・利他の成就を目指す大乗の教えである。それらを、聞く者の能力に応じて各別に示すのが、三乗の教えであり、法相宗の教理がそれに当たる。一乗とは一仏乗を言い、あらゆる能力の者に等しく仏の悟りを目指す教えが示される。三論・天台・華厳の教理がそれに当たる。しかし顕教の教えは密教に較べると低劣であり、したがって成仏に至るまでに悠久の時間を要する。また救済対象も限定的である。

それに対して、自受用法身が説く三密門の教えは、仏が自身の悟りの境地をそのまま説くもので、本来は仏以外の者には感受できない。しかし仏は慈悲心によって特別に秘密の法門を開設して甚深の教えを説く。それが密教である。三密門とは、衆生の身・口・意の三業（身体・言語・心意の活動）が仏の身・口・意の三密と一体となることを目指す教えであり、それを信受すると、衆生の上に即座に仏の境地が現れる。それを即身成仏と言う。この身のままで仏の境地を味わうことができるのである。しかもその教えは、あらゆる能力の者に説かれ、一切衆生が等しく救済される。よってあらゆる観点から密教のほうが優れていると言うのである。

（梯）

【聖教6】声字実相義

版本（高野版）一冊、加点本。表紙には「声字義」の外題と「融仙」の署名、裏表紙見返に「義観」と記され蔵書印がある。

空海（七七四～八三五）著。一巻。活字本は『大正新脩大蔵経』

第七七巻等所収。成立年代は未詳であるが、『即身成仏義』（八二三～八二四頃）の後、『大日経開題』を挟んで余り間を置かない頃とされる（苫米地誠一『平安期真言密教の研究』ノンブル社、二〇〇八年）。

声字（言葉と文字）がそのまま実相（真如）であることが説かれている。通常仏教では、言葉は真如を顕すための方便であり、言葉がそのまま真如なのではないと言う。ところが空海は、密教は法身の説法であり、したがって言葉がそのまま真如であると言う。

第一舒意の章には、声字実相の大意を述べて、法身説法は必ず文字により、文字は六塵を本体とし、六塵の本質は法身の三密であると言う。六塵とは、色・声・香・味・触・法を言う。眼・耳・鼻・舌・身・意の六根の対象となる境界で、通常は心を汚すので塵と言う。ところが法身より繰り出される文字は、清浄でありそのままが真如であると言う。

第二釈名体義の章は、釈名・体義の二節よりなる。釈名では、声・字・実相の語意と関係とを説いて声字即実相を主張する。

体義では、まず『大日経』具縁品の、「等正覚の真言、言名成立の相は」云々の文を掲げ、等正覚とは平等法身の身密であり、すなわち実相であると言う。また真言は声であり、それはすなわち語密（口密）、そして言名とは字であると述べて、この文の中に声字即実相が説かれていると言う。

次に、「五大にみな響あり、十界に言語を具す、六塵ことごとく文字なり、法身はこれ実相なり」と述べ、五大（地・水・火・風・空すなわち世界の構成要素）は声の体であること、仏界の文字の根本は法身であること、六塵にそれぞれ文字の相があることを説いている。空海の法身説法思想の到達点を示す書であると言える。

（梯）

【巻子1】婚迎之記

「婚迎之記」と題された婚礼に関する故実書で、衣装や食事などについて彩色画も交えながら説明がなされる。跋文には、「右日記自古来持伝処／無相違故以自筆奥／書染之訖／延宝八年申十一月廿三日／伊勢兵庫助／貞衡（花押）／松尾勘解由殿」と記される。これに従えば、延宝八年（一六八〇）に故実家である伊勢貞衡（一六〇五～一六八九）が、自家に伝わる書物を写したものということになる。宛所の松尾勘解由についての詳細はわからない。

（馬部）

【巻子2】東大寺正倉院宝物図

天明三年（一七八四）、紙本著色。東大寺正倉院に伝来する宝物を写図した画巻である。巻末に「天明三癸卯年／五月吉日／東大寺奉行役兼／稲垣三徳幸清（花押）」と記されており、制作年と作者の名が知られる。また、巻首には「男爵／三井／南家」の朱文方印が捺されており、本巻の旧所蔵者が三井南家であったことがわかる。

正倉院は北倉・中倉・南倉の三倉に仕切られており、北倉には主に聖武天皇遺愛の品が、中倉・南倉には東大寺に関わる種々の品が納められていた。いずれの倉の宝物も、古代・中世を通して一般の人々の目に触れる機会はなく、正倉院宝物の具体的な姿は一般には知られないままであった。しかし、元禄六年（一六九三）に東大寺別当勧修寺宮済深法親王の命によって、はじめて宝物を描いた「宝物図巻」が作成され、その写本が出回るようになったことにより、状況は大きく転換する。この所謂「元禄図巻」は、そもそも宝物の形を正確に写したものではないとされ、またその転写を繰り返す過程で図像の形態は実物から大きく離れていったと考えられるが、少なくとも近世後期には、正倉院宝物の視覚的イメージが一般に広く共有されるに至ったのである。

本画巻は上記「元禄図巻」の転写本の一つであると考えられる。香木・薬品・武具・楽器・調度・仏具・文具・飲食器の類が、各部法量や材質等の注記を伴って描かれている。注記は各宝物の細部に及んでおり、宝物に施された文様の描出も比較的丁寧である。大ぶりな料紙が用いられていることも相まって、一定の鑑賞性を有する作例であるといえよう。

（苫名）

【巻子3】東大寺宝器図

江戸時代後期、紙本著色。東大寺正倉院に伝来する宝物を写図した画巻である。落款印章等はなく、作者や旧蔵者は不明である。

本画巻も【巻子2】と同様、上記「元禄図巻」の転写本の一つであると考えられる。香木・薬品・武具・楽器・調度・仏具・文具・飲食器の類が、各部法量や材質等の注記を伴って描かれている。細部の法量や材質等の注記は省略される傾向にあり、また宝物の構造や宝物の各部に用いられた材質の種類を把握せずに描かれた箇所も散見する。上記の特徴は「元禄図巻」に基づく転写が繰り返される過程で生じたものと考えられ、本画巻が「元禄図巻」原本の複数回の転写を経て制作されたことを思わせる。

（苫名）

【巻子4】名所十二景絵巻

江戸時代後期、紙本著色。日本各地の名所を詠んだ和歌と、その場景を表した絵を組み合わせた絵巻である。全一二場面からなる。

江戸時代には、日本の各地においてその地の文化的地位を高めるべく八景・十景・十二景等の名所が新たに選定され、これらを題材とした名所絵の制作が行われたことが知られる。ただ、本作品に表された名所は、和歌浦（第一図、現和歌山県）・初瀬山（第二図、現奈良県）・比良山（第三図、現滋賀県）・富士山（第七図、現静岡県・山梨県）・大井川（第八図、現静岡県）・那智の滝（第一一図、現和歌山県）・小塩山（第一二図、現京都府）と複数の地域より選択されており、またいずれも中世以前より歌に詠まれてきた場所で

ある。また、江戸時代に新名所が選定される場合には、これらの地を題材とする和歌が新たに詠進されるのが一般的であったが、本作品に書き込まれた和歌は、いずれも鎌倉時代以前に詠まれたものである。これらのことからすると、本作品は伝統的な名所主題に材を取った作例であるといえる。なお、第四図・第五図・第六図・第九図・第一〇図に書き込まれた和歌には特定の名所が詠み込まれておらず、名所を主題とする作品としてはいささか不審である。

巻末に記された「藤原秀信」という絵師の名は、「狩野内趣秀信」の印章から見て、内匠を通称とした狩野柳雪秀信（一六四七～一七一二）を指すと考えられる。柳雪秀信は築地小田原町狩野家の絵師であり、狩野大学氏信の息子である。『古画備考』によると、宝永六年（一七〇九）の禁裏御所造営に際して画事に携わったことなどが知られる。ただし、先述のように本作品の諸場面に書き込まれた和歌に不審な点があることなどから、本作品の筆者を柳雪秀信と見做すことには慎重になる必要があるだろう。

（翻刻）

［第一図］伊勢しまや　しほひのかたの　朝なきに　かすみにまかふ　和哥の松原

［第二図］いつもみし　松のいろかは　はつせ山　さくらにもる、春のひとしほ

［第三図］花さそふ　比良の山かせ　ふきにけり　こきゆく舟のあとみゆるまて

［第四図］うちしめり　あやめそかほる　ほとときす　なくやさ月の　雨のゆふ暮

［第五図］早苗とる　山田のかけひ　もりにけり　引しめ縄に　露そこほる、

［第六図］へたつとは　みえてまちかく　きこゆ也　霧のうへゆく初かりの声

［第七図］朝日さす　高ねのみ雪　空はれて　たちも及はぬ　ふしの河霧

［第八図］大井川　かせのしからみ　かけてけり　もみちのいかたゆきやらぬまて

［第九図］秋の色を　はらひはてや　久方の　月のかつらに　こからしのかせ

［第一〇図］雪うつむ　その、呉竹　おれふして　ねくらもとむるむらす、めかな

［第一一図］那智の山　雲井にみゆる　いはねより　ちひろにかゝる　瀧のしらいと

［第一二図］あひをひの　をしほの山の　小松はら　いまよりちよの　かけをまたなむ

（苫名）

【巻子5】歴代帝陵図巻

江戸時代後期、紙本著色。表題は箱書による。神武天皇から安永

八年（一七七九）に没する後桃園天皇に至るまでの陵墓を彩色図で示し、周辺の状況などを添え書きしている。内容からして、文化三年（一八〇六）に作成が始まった文化山陵図の写本である。

山陵図の写本系統については、増田一裕「山陵図の基礎的研究」（『考古学雑誌』第八一巻第二号、一九九六年）が詳しい。それに従えば、冒頭に『翁草』（『日本随筆大成』第三期第二〇巻、吉川弘文館、一九七八年、六五頁）の「陵の事」と「歴帝陵左記」が写されている点や、文化修陵事業で言及されなかった讃岐・長門・佐渡などの遠国の山陵を含んでいる点が、国立国会図書館本「享保年間山陵誌」と一致する。この系統の山陵図は、文化山陵図を増補したもので、増訂文化山陵図とされる。増訂文化山陵図は、描写が粗い「享保年間山陵誌」の系統と、比較的細密に描かれた狭山文庫本「廟陵記」の系統にさらに分かれるが、【巻子5】はどちらかというと後者に近い。

（馬部）

【文芸1】住吉法楽連歌百韻

冒頭に「享禄五年正月十八日／何船　住吉法楽」、末尾に「天文第七／六月三日／宗牧／半隠軒」と記される。いわゆる「享禄五年正月十八日雪・宗牧両吟何船百韻」（『国書総目録』同書の項）で、国立国会図書館（連歌叢書古代連歌集三）など、多数伝わる写本のうちの一つにあたる。刊本に「享禄五年正月十八日住吉法楽」（『桂宮本叢書』第一八巻、養徳社、一九五四年）がある。

内容は、享禄五年（一五三二）正月に宗牧（？～一五四五）が三条西実隆（一四五五～一五三七）のもとを訪れたときの連歌である。末尾にあるように、のち天文七年（一五三八）に宗牧が半隠軒に送ったものが写されて多く伝わっている。なお、【文芸1】には、古筆了仲（一六五六～一七三六）の極書が二点添えられている。そこにも記されているように、半隠軒は畠山義総被官で連歌師の飯川半隠軒宗春と考えられる。

（馬部）

【文芸2】賦何船連歌

慶長四年（一五九九）正月一一日に催された連歌会の懐紙を巻子にしたものである。末尾に記された句数からみても、連歌師側の中心は里村紹巴（一五二五～一六〇二）とみてよい。奥田勲「紹巴年譜稿（四・完）」（『宇都宮大学教育学部紀要』第二三号第一部、一九七三年）でも、『国書総目録』でも確認できない、新出の記録である。

主催者は、「本」こと毛利輝元（一五五三～一六二五）である。正室の清光院（一五五八～一六三一）が、毛利家の人物では最も多くの句を詠んでいるのも注目される。当時の輝元は伏見にいたことから、伏見の毛利邸で催された可能性が高い。

輝元の一族では、毛利秀就（一五九五～一六五一）と毛利秀元

（一五七九～一六五〇）も、それぞれ形ばかり一句ずつ詠んでいる。このうち秀就は輝元の実子で、慶長四年の【文芸2】ではまだ幼名だが、この年のうちに豊臣秀頼の偏諱をうけて元服する。一方の秀元は、毛利元就の四男にあたる元清の子である。彼は、秀就が生まれるまで輝元の養子となっていた。

この連歌会を準備したのは、毛利家側で清光院に次いで多くの句を詠んでいる毛利元康（一五六〇～一六〇一）とみられる。元康は元就の八男で、紹巴と親しくしていたことがよく知られる。奥田勲「紹巴年譜稿（四・完）」によると、元康と紹巴は直前の慶長三年一二月一五日・一七日にも連歌会で同席している。

（翻刻）

慶長四年正月十一日

賦何船連歌

梅の香に立ちそふ
春のかすみ哉　本（毛利輝元）

松に長閑けき
風けたつ雲　午歳（毛利輝元室清光院）

山の端ハ雪ま
かへ〳〵あらハれて　秀元（毛利）

なかれ出たる
水みとりなり　松寿丸（毛利秀就）

（中略）

本　八句

午歳　十　元信　六
秀元　一　宗仲　六
松寿丸　一　元家　七
首歳　一　景祐　七
元康（毛利）　九　立意　五
紹巴（里村）　十一　召為　六
玄仍（里村）　十　永真　六
元村　七　能円　一
元良　七

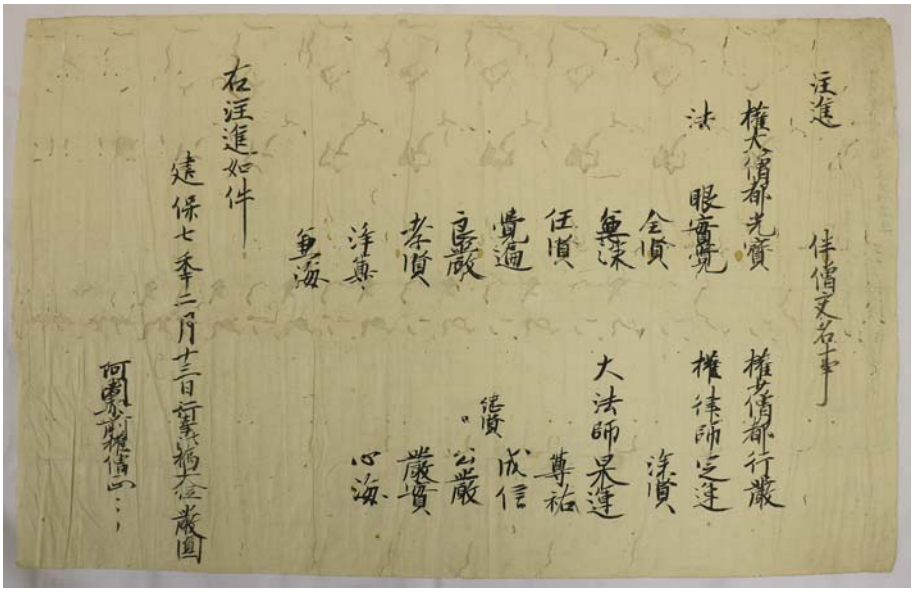
（馬部）

整理番号	書名	日付	西暦	差出・作成者	宛先	法量（cm）	形態	受入時期	請求記号
文書 1	顕杲灌頂勘文	承安 3 年 2 月 27 日	1172	金剛仏子顕杲	—	30.8×346.0	継紙	1999 年 8 月	K 210.088/K
文書 2①	仁王経法伴僧交名注進状案	建保 7 年 2 月 13 日	1219	行事法橋大位厳円	阿闍梨前権僧正、、、	31.6×51.1	竪紙	1999 年 8 月	K 210.088/K
文書 2②	毎月阿弥陀護摩巻数案	安貞 2 年 12 月 20 日	1228	阿闍梨前権僧正、、	—	30.6×50.7	竪紙		
文書 2③	孔雀明王護摩巻数案	寛喜元年 12 月 24 日	1229	阿闍梨前権僧正法印大和尚位、、	—	31.6×50.4	竪紙		
文書 2④	北斗供巻数案	寛喜 4 年正月 9 日	1232	阿闍梨大法師浄、	—	32.1×50.5	竪紙		
文書 2⑤	降三世御修法巻数案	文永 4 年	1267	阿闍梨前権大僧都法印大和尚位親快	—	34.8×50.0	竪紙		
文書 3	足利直義軍勢催促状	観応元年 11 月 23 日	1350	（足利直義）	土屋孫次郎（宗直）	26.2×33.5	1 幅	1999 年 8 月	K 210.088/A
文書 4	和田盛助処分状	寛正 2 年 10 月 24 日	1461	大中臣（和田）盛助	—	29.4×76.8	継紙	1999 年 12 月	K 210.46/W
文書 5	足利政氏書状	（年欠）9 月 17 日	—	（足利政氏）	多賀谷下総入道	19.4×40.3	1 幅	2001 年 1 月	K 210.088/A
文書 6①	室町幕府奉行人連署奉書	永正 16 年 6 月 19 日	1519	（飯尾）貞運・（斎藤）基雄	当地百性中	13.4×40.2	2 通合装 1 幅	1999 年 8 月	K 210.088/M
文書 6②	冨春軒一清寄進状	永禄 2 年 4 月 10 日	1559	冨春軒一清	東禅院泉等軒	11.9×40.1			
文書 7	秋野返答　御條目相違趣意書（四天王寺衆徒相論記録）	享保 15 年 9 月	1730	天王寺二舎利	—	23.2×16.6	竪帳 1 冊	1990 年 4 月	K 322.15/G
文書 8	天王寺秘記（四天王寺境内名所記）	（年月日欠）	—	—	—	24.5×17.2	竪帳 1 冊	1999 年 8 月	K 185.9/T
文書 9①	伴林光平書状	（年欠）9 月 4 日	—	（伴林）光平	牧岡富之輔	16.3×103.1	6 通合装 1 巻	2001 年 4 月	K 915.6/B
文書 9②	伴林光平書状	（年欠）5 月 4 日	—	（伴林）光平	平岡鳥見之介	20.5×30.2			
文書 9③	伴林光平書状	（年欠）3 月 20 日	—	河内八尾（伴林）光平	摂州池田弘誓寺・同中山観音ゟ八丁東ニて山本村西宗寺	15.8×76.4			
文書 9④	伴林光平探鑿書	（年月日欠）	—	神（伴林光平）	布（北畠治房）	16.2×47.0			
文書 9⑤	福井正意翁彰徳文	（年月日欠）	—	（伴林光平）	—	16.0×57.9			
文書 9⑥	伴林光平書状（後欠）	（年月日欠）	—	（伴林光平）	—	16.2×36.6			
文書10①	序文	大正 2 年秋	1913	（土方）久元・（中山）孝麿	—	20.5×73.5	4 通合装 1 巻	2000 年 7 月	K 210.58/B
文書10②	天誅組檄文	文久 3 年 9 月	1863	（伴林光平）	（大和国吉野郡北山郷）	17.6×114.7			
文書10③	北畠治房書簡・封筒	明治 43 年 8 月 17 日	1910	北畠治房	山移定政	17.9×130.3			
文書10④	北畠治房書簡	庚戌（明治 43 年）9 月 20 日	1910	布穀生（北畠治房）	山移賢兄（定政）	17.9×65.3			
文書11	桂小五郎書状	（年欠）8 月 16 日	—	木圭（桂小五郎）	大和老兄（大和弥八郎）	19.5×49.1	1 巻	2000 年 6 月	K 289.1/K
文書12①	徳富蘇峰書簡・封筒	明治 27 年 12 月 16 日	1894	東京赤坂氷川町五徳富猪一郎	佐世保水雷隊管設部軍医長佐伯理一郎	17.4×96.0	6 通合装 1 巻	2000 年 6 月	K 289.1/T
文書12②	徳富蘇峰書簡・封筒	明治 31 年 6 月 20 日	1898	東京徳富猪一郎	京都烏丸通京都看病婦学校佐伯理一郎	17.4×42.2			
文書12③	徳富蘇峰書簡・封筒	大正 4 年 2 月 8 日	1915	東京日吉町国民新聞社徳富猪一郎	京都市室町通中長者町四佐伯理一郎	18.6×59.8			
文書12④	徳富蘇峰書簡	大正 4 年 9 月 6 日	1915	猪（徳富猪一郎）	佐伯大人（理一郎）	18.6×79.1			
文書12⑤	徳富蘇峰書簡・封筒	大正 5 年 12 月 14 日	1916	東京日吉町国民新聞社徳富猪一郎	京都市室町通中長者町佐伯理一郎	18.6×85.5			
文書12⑥	徳富蘇峰書簡・封筒	大正 6 年 1 月 6 日	1917	東京市青山南町六之三十徳富猪一郎	京都市室町通中長者町佐伯理一郎	18.6×70.5			
絵図 1	戒壇堂荘厳之図	享保 20 年 4 月	1735	年預伍師権少僧都懐賢	—	115.5×115.3	絵図 1 舗	2002 年 2 月	K 521.81/T
絵図 2	東大寺戒壇院境内絵図	安永 3 年 10 月	1774	長老明道・寺護瑞鑑	—	125.0×141.1	絵図 1 舗	2002 年 2 月	K 521.81/T
絵図 3	戒壇院僧坊等麁色	（年月日欠）	—	大工次郎三郎	—	28.6×23.6	竪帳 1 冊	2002 年 2 月	K 521.81/K

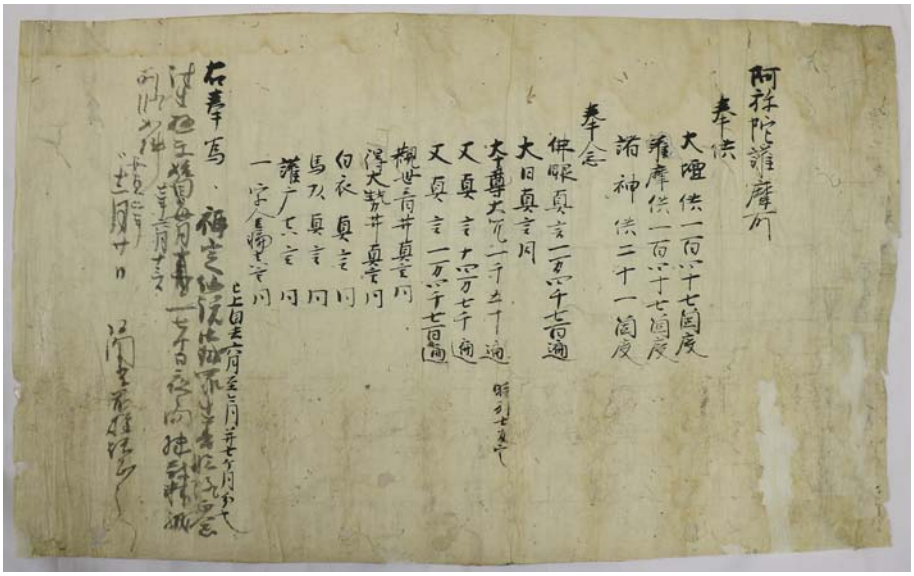
絵図 4	四天王寺火除地絵図	享和元年 4 月	1801	四天王寺役人田中恒右衛門・同古沢外記	永井日向守様御預り所摂州東生郡天王寺村庄屋藤左衛門他 16 名	127.8×93.5	絵図 1 舗	2000 年 4 月	K 290.38/S
聖教 1	大般若波羅蜜多経　巻第五百三十四（殖木宮大般若経）	（年月日欠）	—	—	—	24.7×819.5	1 巻	1999 年 8 月	K 183.2/D
聖教 2	大般若波羅蜜多経　巻第一百三	（年月日欠）	—	—	—	26.4×793.3	1 巻	1999 年 8 月	K 183.2/D
聖教 3	紺紙金銀字交書法華経断簡	（年月日欠）	—	—	—	24.4×48.6	1 幅	1999 年 8 月	K 210.088/K
聖教 4	仁王経等八法口訣	明暦 2 年 2 月	1656	多聞院小比丘恵覚	—	32.4×869.0	1 巻	1999 年 8 月	K 210.088/N
聖教 5	辨顕密二教論	（年月日欠）		空海	—	24.7×15.8	竪帳 2 冊	1999 年 8 月	K 210.088/B
聖教 6	声字実相儀	（年月日欠）		空海	—	24.8×15.9	竪帳 1 冊	1999 年 8 月	K 210.088/S
書幅 1	和歌二行書幅（鶴千年友）	（年月日欠）	—	権中納言（三条西）季知	—	83.0×35.2	1 幅	2000 年 6 月	K 210.088/S/1
書幅 2	和歌二行書幅（祝のころを）	（年月日欠）	—	権中納言（三条西）季知	—	83.0×35.2	1 幅	2000 年 6 月	K 210.088/S/2
書幅 3	五絶二行書幅	（年月日欠）	—	松菊夜生（木戸孝允）	—	117.5×30.7	1 幅	2000 年 6 月	K 210.088/K
書幅 4	七絶四行書幅	庚午（明治 3）冬	1870	甲東（大久保利通）	—	122.5×57.0	1 幅	2000 年 6 月	K 210.088/O
書幅 5	七絶三行書幅	（年月日欠）	—	（徳富）蘇峰	—	141.0×41.3	1 幅	2000 年 6 月	K 289.1/T
巻子 1	婚迎之記	延宝 8 年 11 月 23 日	1680	伊勢兵庫助貞衡	松尾勘解由	28.2×740.7	1 巻	1999 年 8 月	K 210.088/K
巻子 2	東大寺正倉院宝物図	天明 3 年 5 月	1784	東大寺奉行役兼稲垣三徳幸清	—	38.7×1303.7	1 巻	2000 年 4 月	K 709.1/T
巻子 3	東大寺宝器図	（年月日欠）		—	—	28.7×874.4	1 巻	2003 年 6 月	K 709.3/T
巻子 4	名所十二景絵巻	（年月日欠）		（伝）狩野秀信	—	26.7×818.3	1 巻	1999 年 8 月	K 721.4/M
巻子 5	歴代帝陵図巻	（年月日欠）		—	—	25.8×2327.5	1 巻	2000 年 4 月	K 288.46/R
文芸 1	住吉法楽連歌百韻	享禄 5 年正月 18 日	1532	宗牧	—	13.3×562.5	1 巻	1999 年 8 月	K 911.2/S
文芸 2	賦何船連歌	慶長 4 年正月 11 日	1599	紹巴	—	18.0×406.8	1 巻	1999 年 8 月	K 911.2/F
文芸 3	源氏箒木抄（津守家旧蔵）	延宝 2 年 12 月中旬	1674	（津守）国治	—	15.7×18.7	列帖装 1 冊	1999 年 8 月	K 913.365/G
文芸 4	源語秘訣　全（津守家旧蔵）	延宝 7 年 11 月 2 日	1679	節水	—	24.6×18.1	列帖装 1 冊	1999 年 8 月	K 913.364/G
文芸 5	道明寺奉納三吟千句	延享 2 年	1745	平野郷土橋良慶	—	15.0×25.0	竪半裁帳 1 冊	2000 年 7 月	K 911.3/D
刊本 1	増補改正河内細見図　全	安永 5 年 10 月	1776	鳴井兵右衛門作・高木容膝斎正恒画	—	52.0×141.5	絵図 1 舗	2003 年 6 月	K 290.38/K
刊本 2	北蝦夷餘誌	庚申（万延元年）	1860	松浦竹四郎	—	25.8×17.9	竪帳 1 冊	2000 年 4 月	K 211/M
刊本 3	十勝日誌　全	萬延元年	1860	松浦竹四郎	—	25.8×17.9	竪帳 1 冊	2000 年 4 月	K 211.3/M
刊本 4	納紗布日誌	萬延元年	1860	松浦竹四郎	—	25.2×17.5	竪帳 1 冊	2000 年 4 月	K 211/M

註）整理番号の丸数字は枝番号。法量は本紙部分。

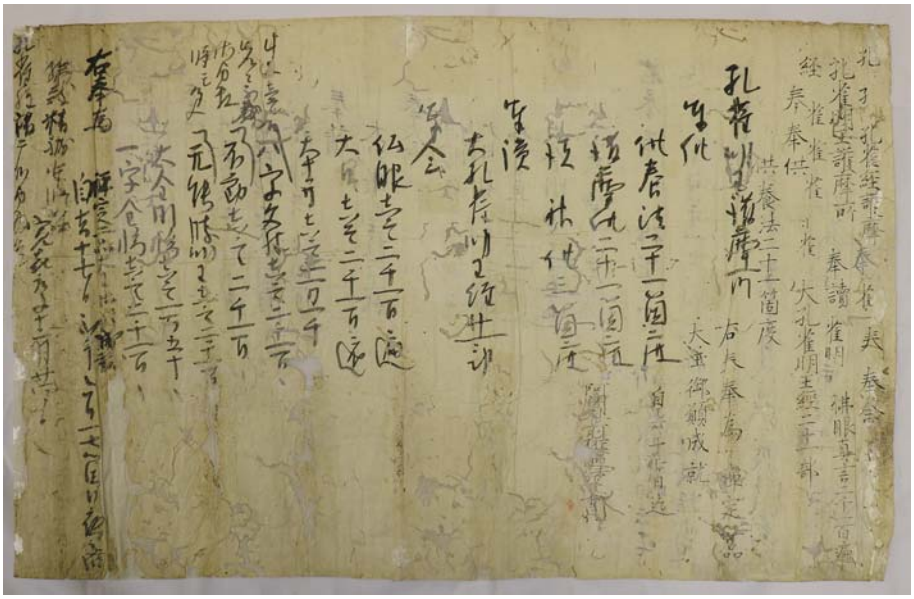
【文書 1】顕杲灌頂勘文



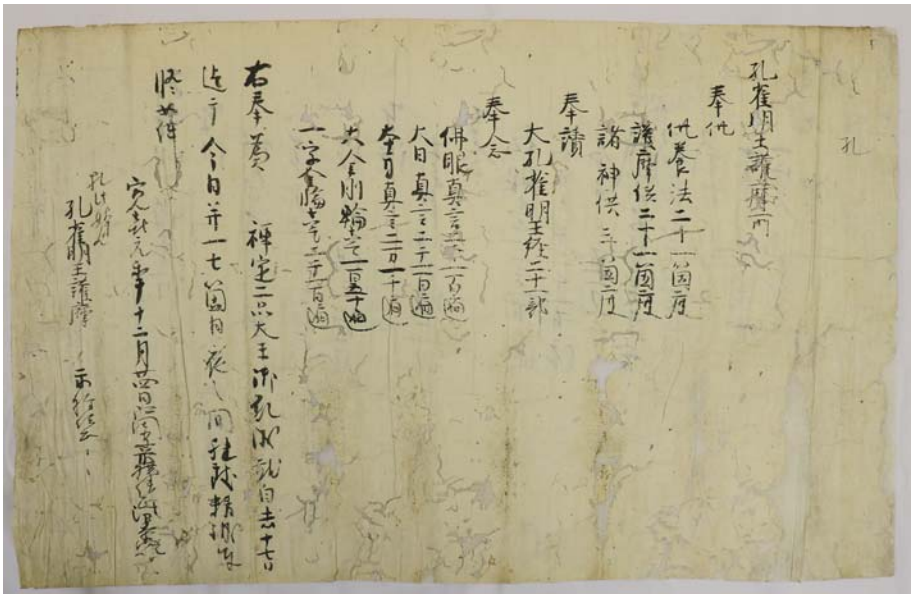
【文書 2①】仁王経法伴僧交名注進状案



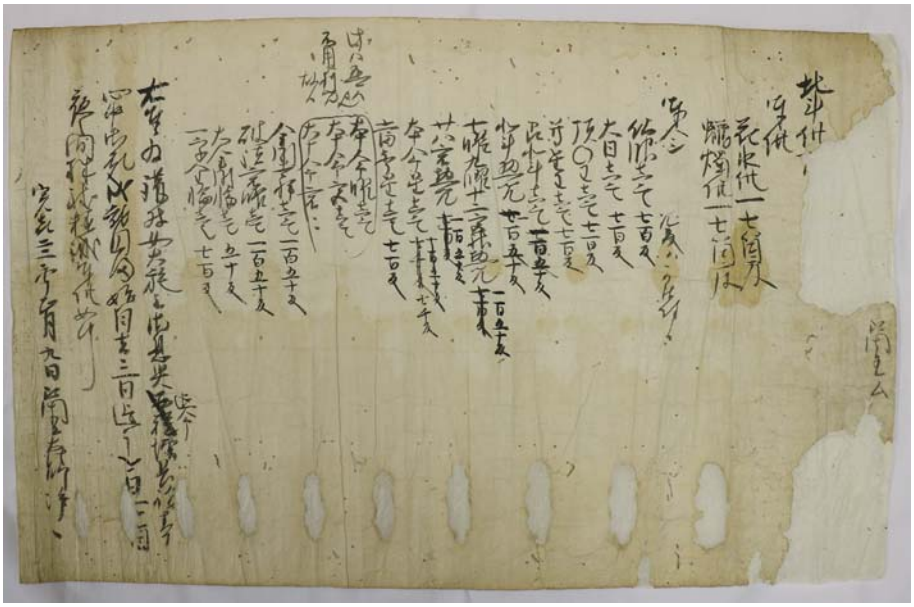
【文書 2②】毎月阿弥陀護摩巻数案



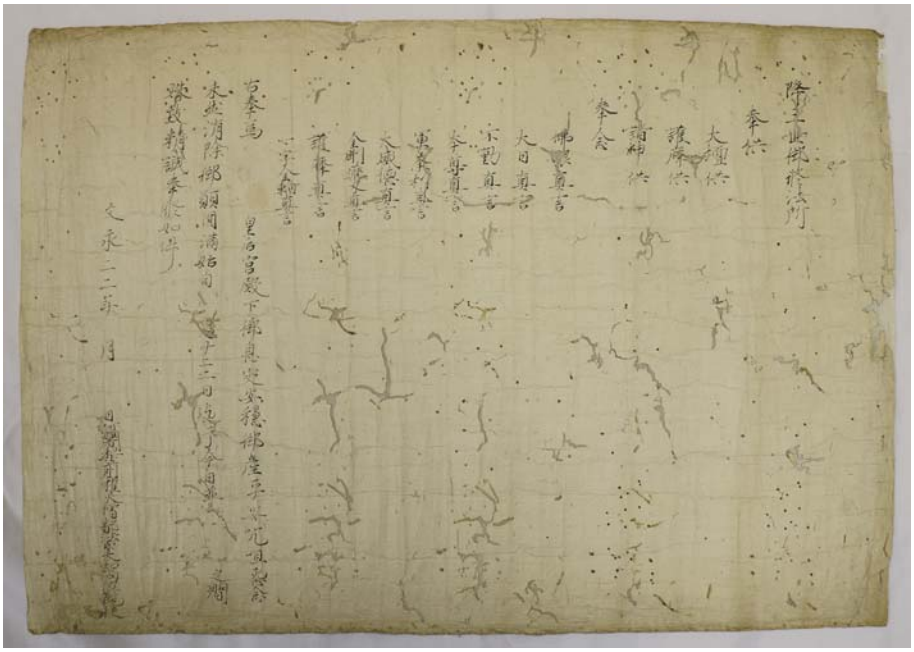
【文書 2③】孔雀明王護摩巻数案（表）



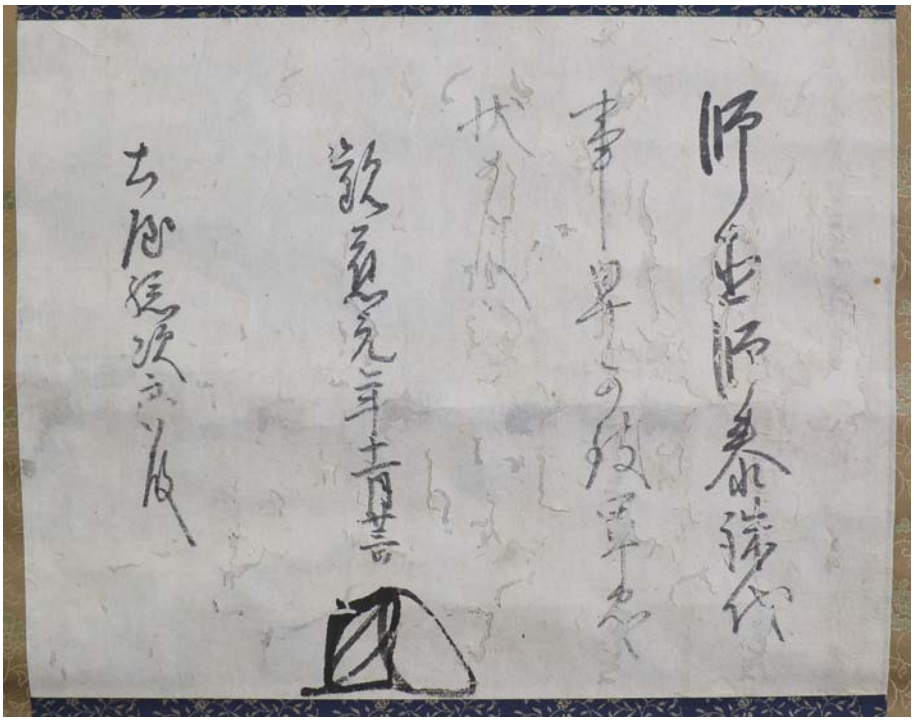
【文書 2③】孔雀明王護摩巻数案（裏）



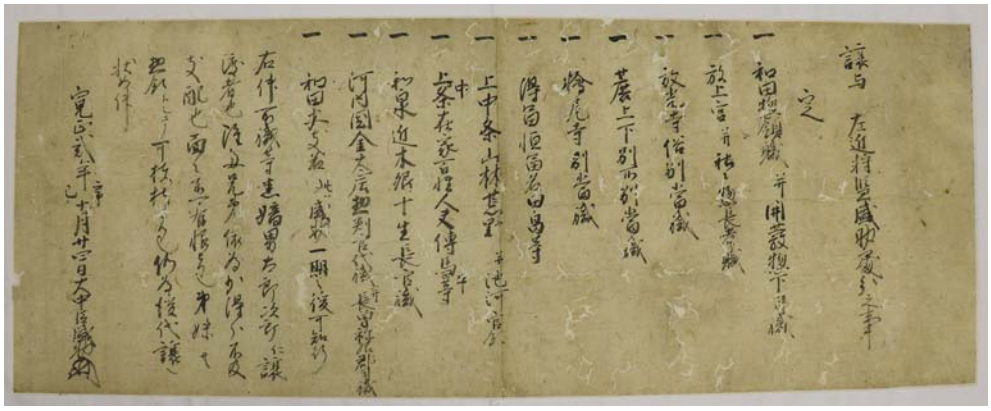
【文書 2④】北斗供巻数案



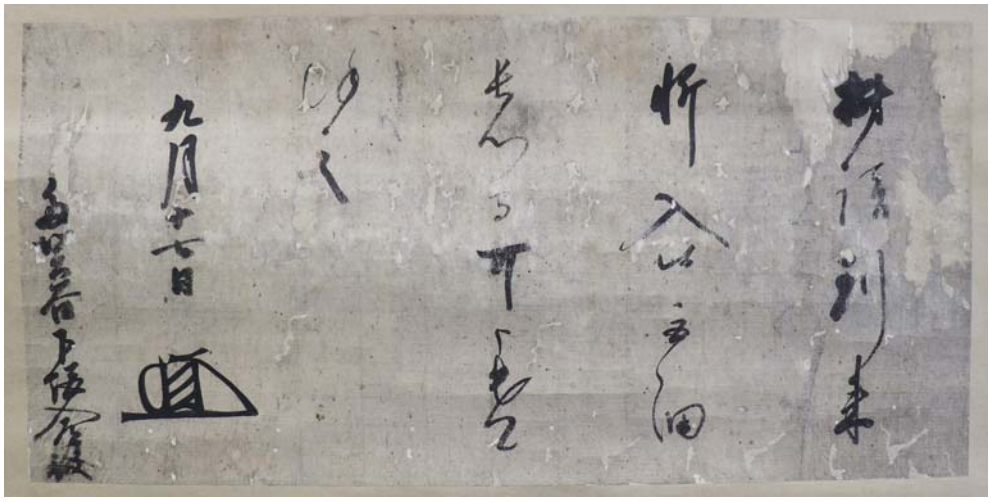
【文書 2⑤】降三世御修法巻数案



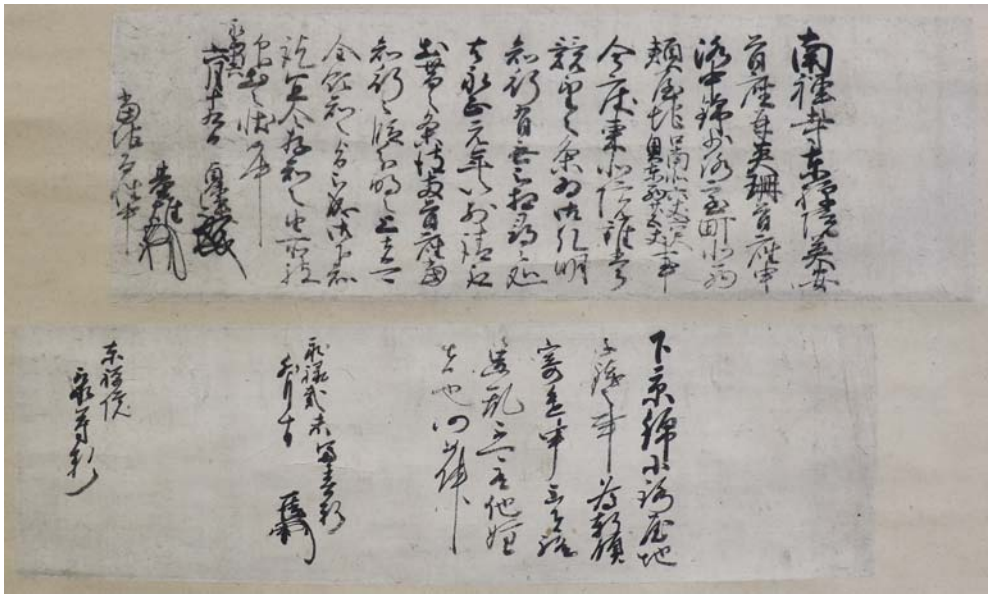
【文書 3】足利直義軍勢催促状



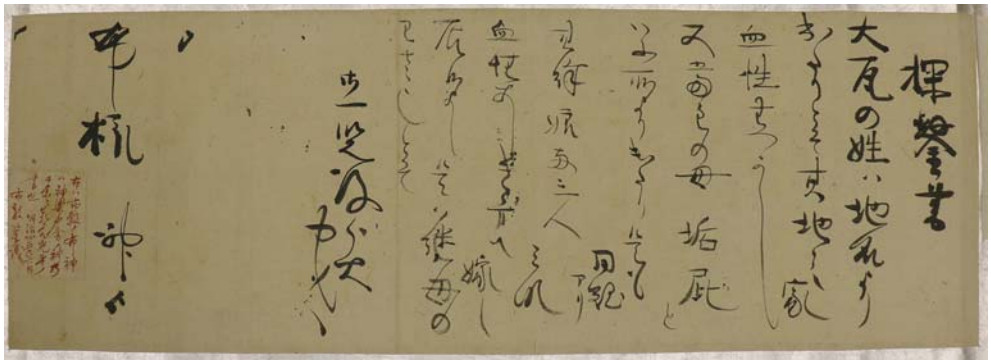
【文書 4】和田盛助処分状



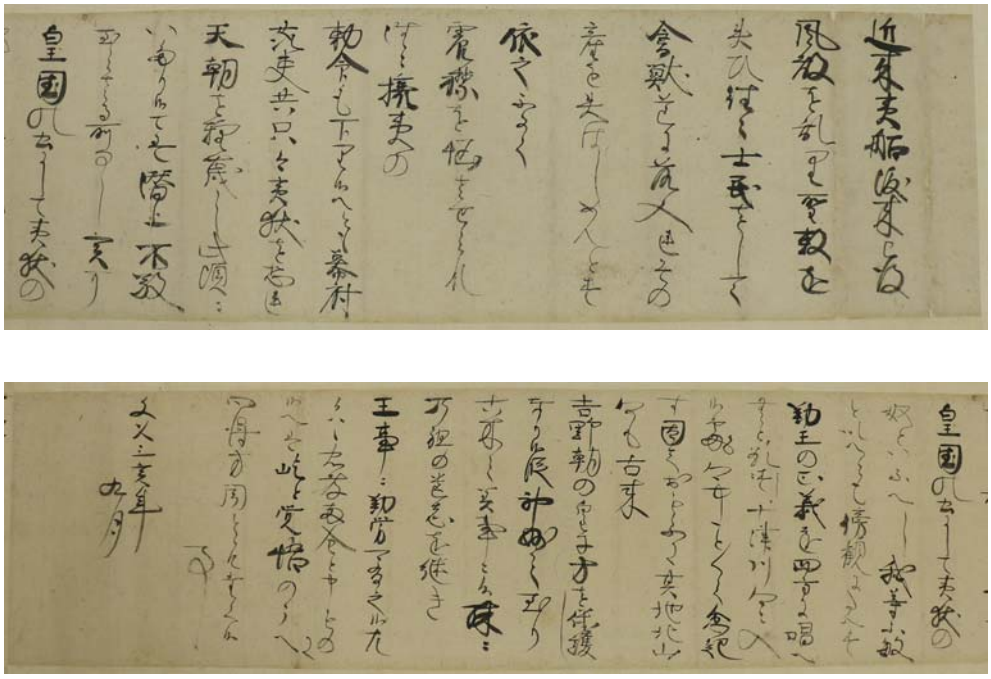
【文書 5】足利政氏書状



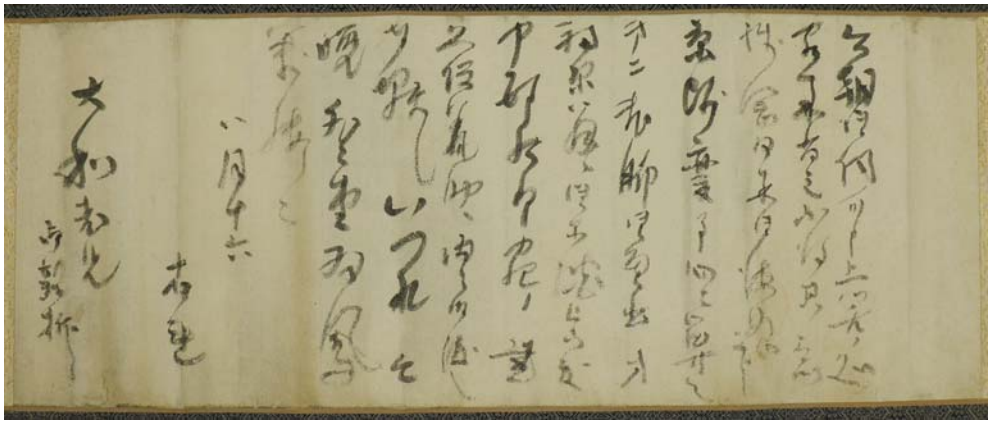
【文書 6】室町幕府奉行人連署奉書・冨春軒一清寄進状



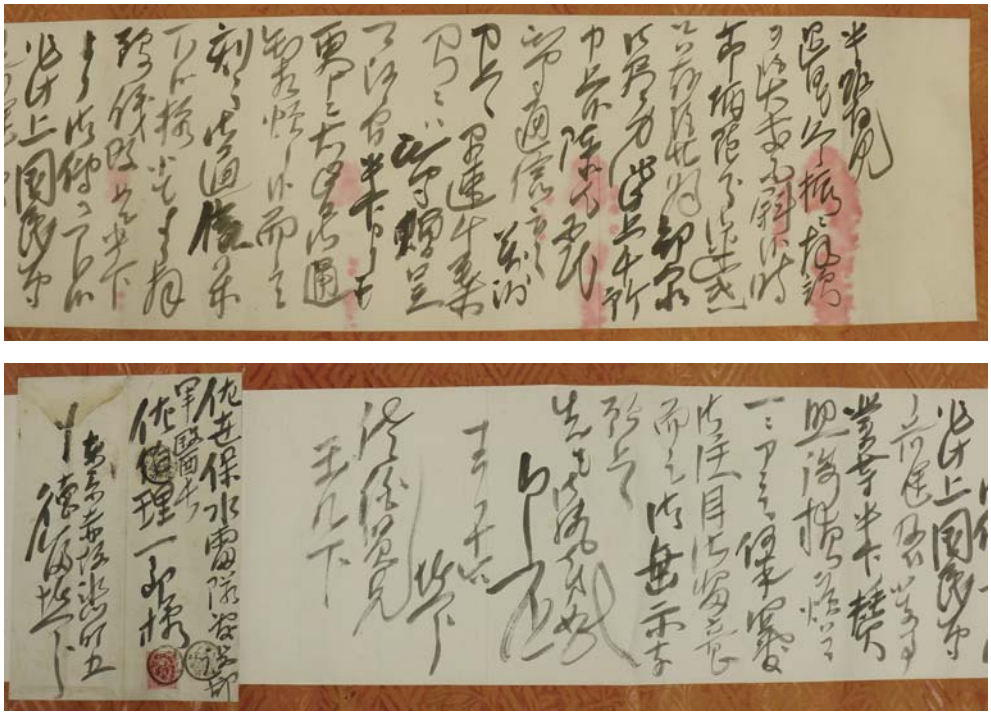
【文書 9④】伴林光平探鑿書



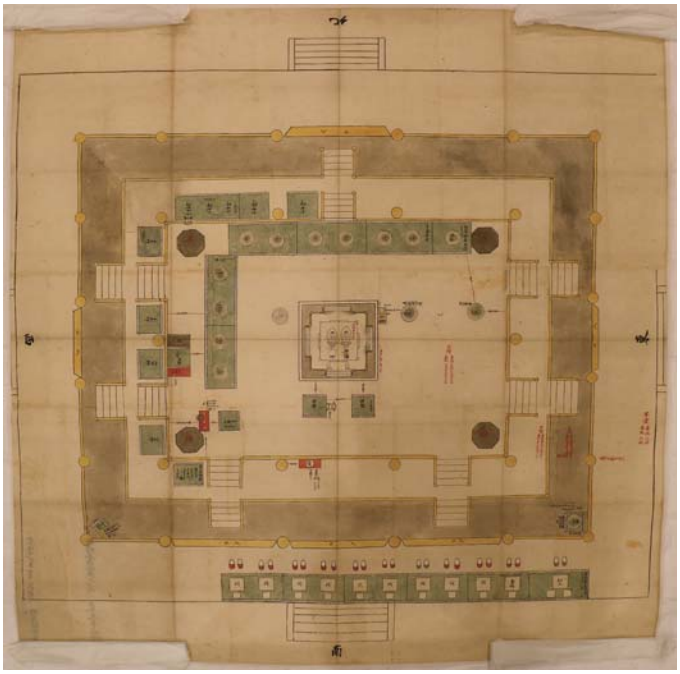
【文書 10②】天誅組檄文



【文書 11】桂小五郎書状

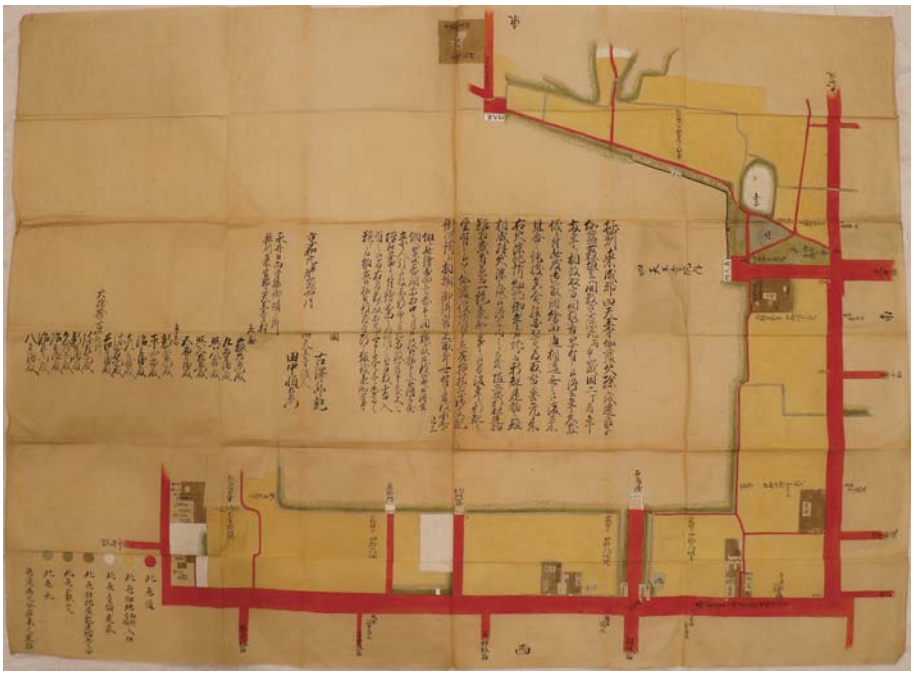


【文書 12①】徳富蘇峰書簡・封筒

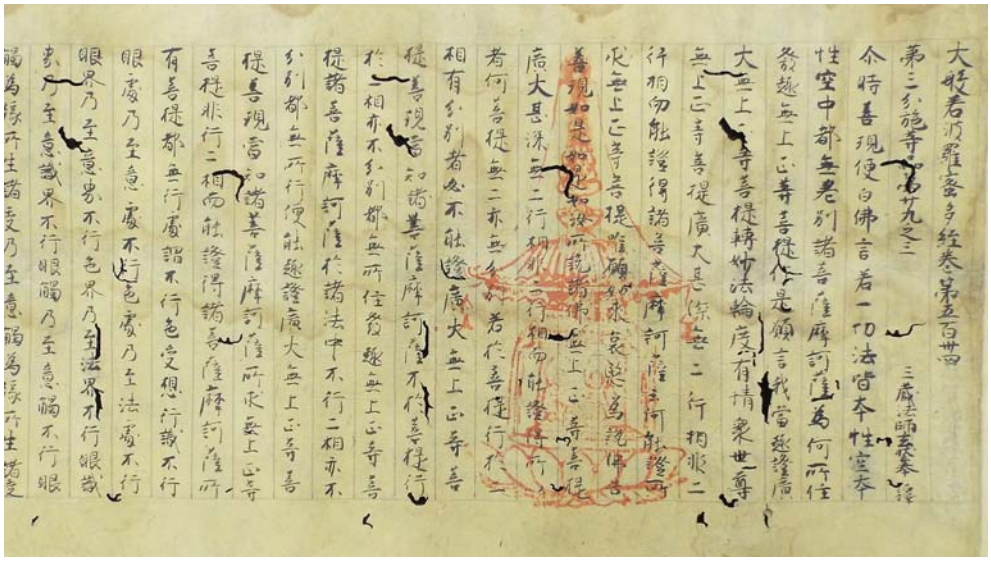


【絵図 1】戒壇堂荘厳之図

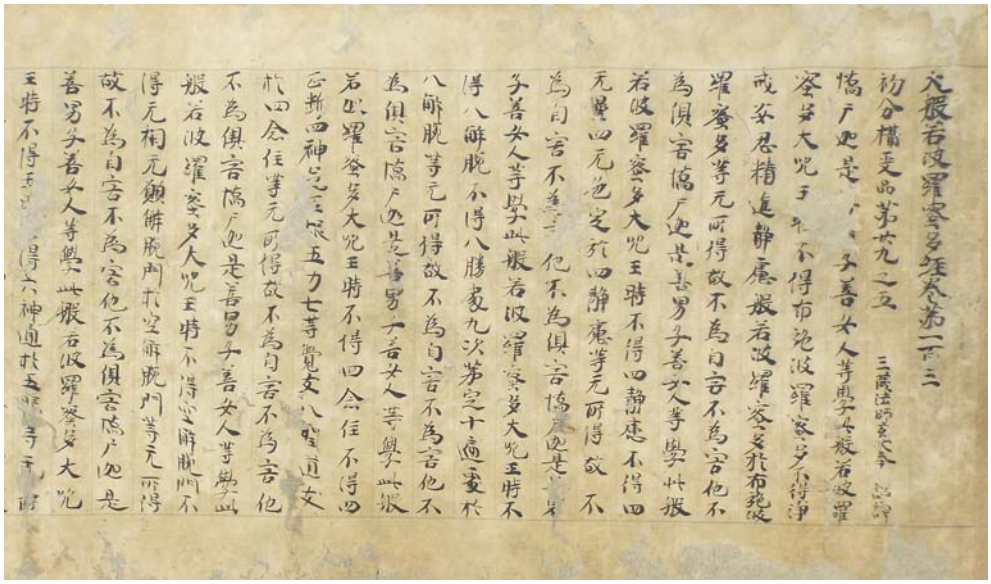
【絵図 2】東大寺戒壇院境内絵図



【絵図 4】四天王寺火除地絵図



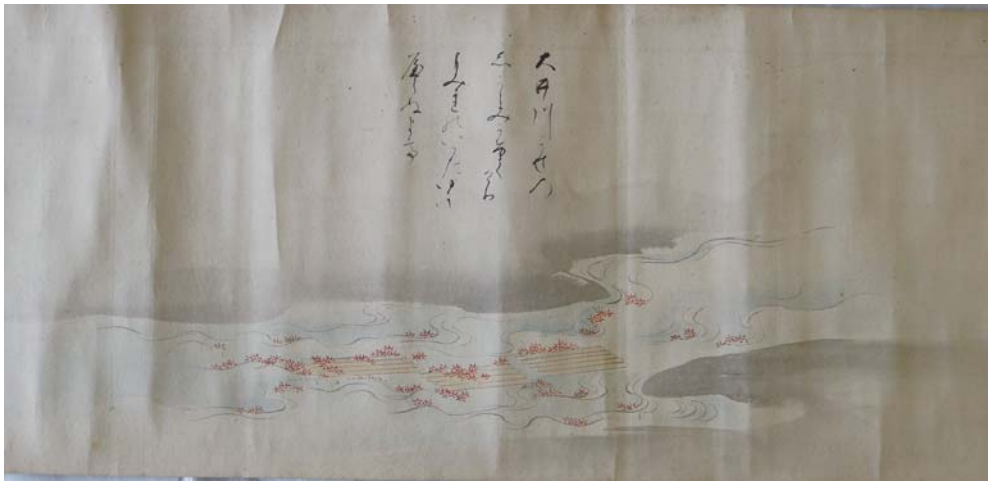
【聖教 1】大般若波羅蜜多経　巻第五百三十四（殖木宮大般若経）



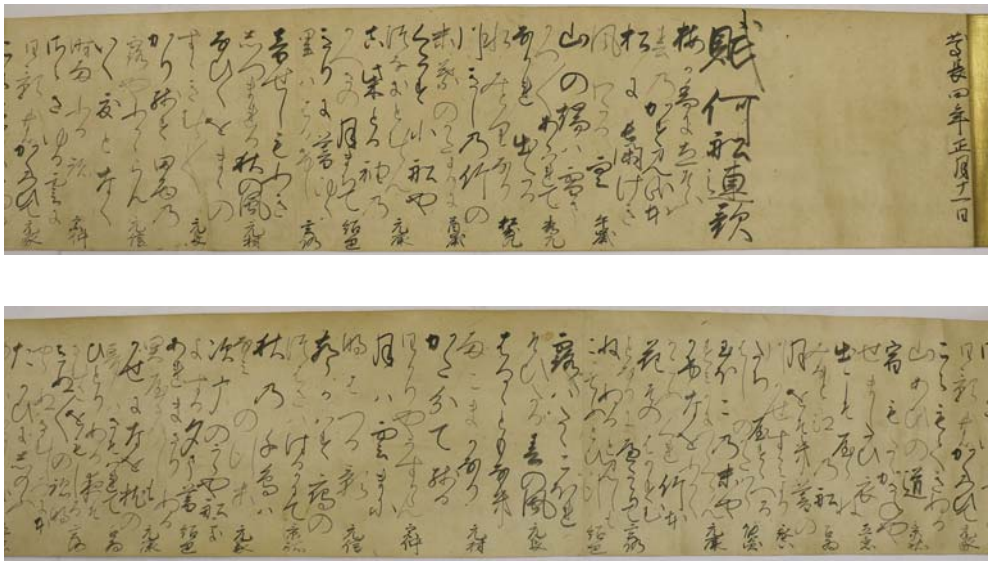
【聖教 2】大般若波羅蜜多経　巻第一百三

【聖教 3】紺紙金銀字交書法華経断簡

【巻子 4】名所十二景絵巻（初瀬山）



【巻子 4】名所十二景絵巻（大井川）



【文芸 2】賦何船連歌